

# 藻場評価手法の研究開発： 海藻・海草の被度と現存量の関係式

生態工学グループ

## 研究の背景・目的

藻場（海藻・海草<sup>注</sup>）が生育する場所）による炭素隔離・貯留機能は大きな注目を集めています。その機能を算出するためには、海藻・海草の藻草体を海中から回収して現存量を求めることが必要になりますが、その作業は重労働になります。また、藻場が衰退する“磯焼け”が起きている海域では、藻草体の回収はためられません。一方、海藻・海草の被度の測定は藻草体を取り除く必要がなく、簡便に実施できるモニタリング方法です。海藻・海草の分類群ごとに現存量と被度の関係式を求められれば、被度の測定だけで現存量を推定できるようになります。

注）海藻とはコンブ・ワカメなどの孢子で増える藻類、海草とはアマモ・スガモなどの陸上種子植物と同じグループのものです。

## 研究成果

本研究では日本沿岸の岩礁に生育するコンブ類、カジメ類、アラメ類、ワカメ、温帯性・亜熱帯性ホンダワラ類、小型海藻（褐藻、緑藻、紅藻）、スガモの被度と現存量のデータを野外調査及び既往文献から収集し、海域ごとに被度と現存量の関係式を求めました（図1）。

## 波及効果

本研究で得られた関係式から、被度のモニタリングデータを藻場の炭素隔離・貯留機能の算定に活用できる現存量に変換できます。海草・海藻藻場のCO<sub>2</sub>貯留量算定ガイドブック（水産研究・教育機構）と併用することで、我が国の温室効果ガス目録の更新や、ブルーカーボנקレジット申請における藻場のCO<sub>2</sub>貯留量の算定が簡易になることが期待されます。

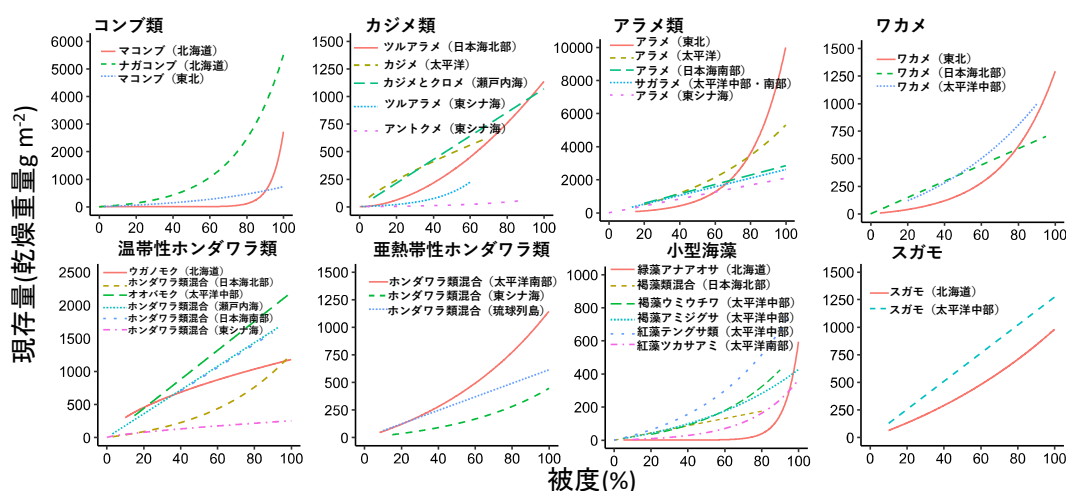


図1 海藻・海草の被度と現存量の関係式

（本研究は農林水産省委託プロジェクト研究（JPJ008722）として実施し、日本水産学会誌 92 巻 2 号に公表済みです）

（佐藤 允昭）